
隣のホストさん

松原志央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のホストさん

【Zコード】

Z9858A

【作者名】

松原志央

【あらすじ】

じゃないアパートに一人暮らしをする18歳の現役女子高校生・仲間紫唾は勉強のためと辞めさせられたバイオリンがまだ心を掴み、何と無く空っぽの毎日を送っていた。そんなある日、隣に越してきました5年上のホスト・橋矢田弥恵が彼女の部屋に誤つて帰宅、睡眠。それをきっかけに始まるホスト×女子高校生の恋。

わざと恋に落ちた瞬間（前書き）

不定期更新になると感じますが……。毎回お読み下さい。
面白ないと感じただけたら、嬉しいです。

ひとつ恋に落ちた瞬間

私、現役女子高校生の仲間 紫唾は、じがないアパートに住む18歳だ。

平穏な生活を愛し、勉強にも励み……な、分けなく、勉強のためと16の時辞めさせられた大好きだったバイオリンが私の心を掴んではなさない。

生活に潤いがなかつた。しかしこの潤いのない生活も昨日から私の隣に越してきた人物により終りを告げることになる。

「弥恵さん……何やつてるんですか」

「んー？ しいちゃん家で『』飯」

今、昨日から越してきた隣人は私の部屋について、シチューをすすりつつ、にへらあ、と笑つ。

「……それでもホストなんだから呆れる……」

「しげちゃんだつて、高校生なのに主婦並に『』飯作れいやうじやない」

「……もつ良いです

全く、弥恵さん 橋矢田 弥恵さんハシヤタヒロが隣に越してきたからと言ひ。

それよりも驚くのは弥恵さんの体格。あんなに沢山食べるのに相変わらず肉付きの悪い腕してるし。

私は自分のシチューをよそつて弥恵さんの正面に座る。

「しげちゃんたら照れちゃってかあ～い」

「は」

「だから、かあにこいつらの」

「……ホストには騙されない」

「なつーちよーとそれ酷くない？！俺は今仕事のつもりじゃないんだけどー！」

「でも流石職業ですよね。口がうまいし。せいやつてまた私を誉めてご飯頂くつもりよね」

「ばれた？」

本日2回目のあの笑い。実は物凄くこれがN.O.・1ホストの座を誰にも渡さない物だつたり。5つも年上のこの男は、出会ったときからへタれていた。

雨の日だった。久し振りにバイオリンが弾きたくなり、リビングでバイオリンを弾いていた。曲は『フレリュード』。

きっとバイオリンで玄関が開く音が聞こえなかつたんだ。私がリビングを後にし、寝室へ足を運ぶと……。

「……もう、嫌だよ……真由……帰つて来てよ

「……」

ベッドには今日越してきた隣人、弥恵さんが泣きながら寝ていた。どちらの職業はホストらしいと聞いていたが本当らしい。こんな時間に帰つて来るなんて。しかもこのスーツ。派手なインナーの襟を出しキメキメのホストだ。

「…………私の家だよね」

「……」

「起きろ馬鹿ホストがあああー！」

「ぎあああー！」

私は最初に相手が泣きながら寝ていた事も忘れ、きっとホストが口説きに来たんだわ、何でおかしな発想のもと弥恵さんを蹴りあげた気がする。

あれは絶対に間違えて入つて来た弥恵さんが悪い。……百歩譲り鍵を賭けていなかつた私も私として。

なのに弥恵さんは『ホストの顔に傷付けたら商売にならないよ。お詫びに俺にご飯作りなさい』とか言つて現在に至る。

どうせそれきりの付き合いだと思つていたから、今日の夕方にインターホンがなつたのには驚いた。

「…………弥恵さん？」

「へへ……しちゃんの『ご飯が食べたくなつちやつた

あまりにも不意打ち過ぎませんか。だつて仮にもノーリホスト、誰だつてちょっとときめくわけで。

「……やだ

「ええ！冷たくない？！俺まだ昨日のお酒抜けてなんだよ？水とか
！水！」

「弥恵さんとか人一倍お酒抜けるの早そうじやないですかっ！」

ほら出た。あの笑い……いかん！私の敵ね。

「……じゃあ、待つててください？シチュー作りますから」

「さっすがしげちゃん！でもコーンはよじてよ

「早速入れるもののが決まつたわね」

「小悪魔！」

ほらね、その笑みがまた私を貴方に近付けた。本当に敵だ。

ちょっと、恋に落ちた瞬間。

ホストクラブ フィーバー（前書き）

引き続き楽しんでいただけたら幸いです。

ホストクラブ フィーバー

恋を自覚したとして、5つ年上の弥恵さんだから私に勝ち田はないのは分かっている。でも。

出合つて一週間。一向に諦めがつかない私つて未練がましいだろうか。

会わなければ忘れられるのに。弥恵さんたら鈍いから

「じいちゃんの」飯~」「

とか言いながらほほ毎日家に来るわけで。でもきっと私がひとつかじゃない。

弥恵さんはホストだし。それなりに出会いは沢山あるわけで。

「じいちゃんつー今日俺とデートしない?」

そんな事言われたら、期待しちゃうし傷付くのも分かつてるの。

「……」

「じいちゃんてば……。俺が服買ってあげる。いつも美味しい」飯のお礼

あの笑みと気持とが重なつて。

「……じゃ行く

なあんて強がつて結局OKしちゃうわけで。流石ノ。・1ホスト

だなあとか。

だつて入る店がセシール・マクベイツで……。

「しいちゃんセシール好き?」

「否、着たこと無いですか」

「マジドー?」

そんなに切長の目で見つめないでよ。やっぱ店の密とかはセシールとかフツーに着てるんだろう。

ん?私は別に弥恵さんは諦めるんだから比べなくても良いの!全く自分で呆れる位惚れちゃったみたいだ。

「レーレーなんて言つて楽しそうな弥恵さんを見つめた。

「あれ?しいちゃん俺に惚れちゃった?」

「……」

幸い、赤裸々を見られたくなくて手刀を食らわせたのが良かつた。ばれてない。

「いいつたー!ホストの顔は財産!毎日、飯作って貰うからね!」

「なつ……ー」

そんな事したらまた諦めがつかなくなる。この人は本当に私を困らせる。

「嫌かな……」

ホスト特有の演技ですねて見せる。分かつてゐるに騙される私。

「分かつたから……」

「マジで?」

ああもう頼むから、その笑顔。心臓が跳ねた。だいたい、私がご飯を作つたことで、私にとくなんかない。

「服、こんだけ買えばいいでしょ

「いや……逆に弥恵さん迷惑じやん。良いよ、そんなこ

「いやない?」

ちょっと悲しそうに伏せる田。もづ一體なんなのだ。こんなに沢山(一年分くらい)セシールを……いくら金持ちとは言え、ねえ。

「沢山あつすすぎですよ。私、一日分で大丈夫……」

「だあめ。俺も沢山作つてもうつんだからーそれに……

「ああ。そういう事ですか。それに?何だら?。

「これ着れば、しちゃん俺の職場見にこれるよ~

「……。」

私が3日前に言つた事をちゃんと覚えていたらし。

一回弥恵さんの職場が見たいと思った。純粹に。あまりに純粹過ぎて心で思つていたことが口に出たのだ。

「弥恵さんの働いてる所見たいな……」

「おひーなになに? しちゃんからのお願い?」

「あ、畠……あの」

「良じよ。今度店においでよ。支配人には言つておへか」

「え、良いです! だつて私、そんなに高い服とか持つてないから場違いで浮こちやうし……」

私が思つ出したのを見て弥恵さんの笑顔が出る。

「だから、ね?」

「……あの、私一年も通つなんて言つてな……」

「フフフ……それはどうかな」

弥恵さんの目が怪しく光つた。

その日の夜

「はいーでは今日も畠さん頑張つて下さいね。……」「で今日一日だけこのホストクラブでスウェーツデザイナーとして働いてくれる口を紹介する

「

私は、緊張しながら前へでた。視線が痛い。男だけのホストクラブに女の従業員が入るのが珍しいせいもあるからだろう。この中で唯一弥恵さんだけがクスクス笑っていた。

「仲間紫暉です。……今日一日お世話をになります」

「おい、支配人！」

1人のホストがいきなり声を大きくする。やっぱり女の従業員はまずいんだ……。

私は何か言われることを予想して口を固くつむった。が。

「かあいいじゃねえか！愛称決めないとな！」

「おお、そりゃそうだ」

次々にホスト達が私に近付いてきた。私はわけが分からないまボウとしていると、遠くの方から声がした。

「ヤエさん、なにがいいでしょっか？」

「ああ、その子なら俺はシィちゃんって読んでるけど。」

「おい、ぴたりじゃん？じゃ、シィにてよひへ？」

「了解～！」

「シィ、宜しくな

「はつはいー！」

「シイ、俺に惚れよ」
「」

「嫌です」

「もひ。 しいちゃんは冷たいのね……」

肩に置かれた手。肩まである髪をオールバックに整えている。弥惠さんだ。

「何だか弥恵さんさんが違う人に見えて嫌です……」

「本名で呼ぶなよ。もう開店してるんだから。ヤエって呼べ

「……それ、ホストとして使ってる名前ですか？」

「そうそう。おおひと、ミサキさんだ！じゃね。頑張りな

ポンツと私の頭を軽く弾いて駆けて行く。まだ私を諦めさせるつもりはないらしい……。ボウしていたら、支配人に呼ばれた。

「シイー」
「」

「はいー何ですか？」

「はいーシイの持ち場」

キッチン。もともとフランス生まれフランス育ちの私は、バイオリンを始め、パーティシェなどの勉強もしていたためこの分野は強い。

「頑張れ」

「はー」

開店後5分。始めてスウェーツの注文が入る。

「シイー！アプリコットジュエル一つ入りますー！」

弥恵さんのお客なんだ。

「かしこまりましたあー！」

直ぐに生地を焼いてアプリコットをのせて行く。数分後アプリコットジュエルはお客さんに運ばれた。

「お待たせいたしました。アプリコットジュエルです」

「ありがとう」

お客さんが口に運ぶ。私は少し緊張した。

「……」

「ミサキさん、美味しい？」

「……こんなに美味しいの始めてよ……ー。」

「やっぱね。シイのスウェーツは最高でしょー。」

「これを作つてこる人はシイさんつて言ひの~。」

「うん」

「シイさんを呼んでくれる?」

「良こよ……シイー……ー!! カキちゃん。シイ忙しそうだから後でね」

「やうね……」

私はミサキさんとが眞つむ密さんとが注文していろいろ、物凄くいそがしかつた。

スウェーツは飛ぶよつて売れたため、直ぐになくな。

「今日はスウェーツおしまいだよ」

ホスト達も何度も誤らなくてはならなかつた。

仕事後

「しげちやんお疲れ様!」

「弥恵さん……」

「凄かつたね……」

「はい」

「あのや……もう!!」で働く気はない? 楽しくなかつた?」

「え……」

「支配人がしいちゃん雇いたいってさ」

「……！支配人に会つて来ます！」

駆けて行く紫暉を見送りながら弥恵はクスクスと笑つた。

「まさかしいちゃんがここで働くなんて……」

つづく

テストとバイオリン（前書き）

皆さんに楽しんでいただき、メッセージを貰いつゝかとても幸せに感じます。

テストとバイオリン

木枯らしが吹きます。寒くなってきたな。

秋です！

何てはしゃぐ私、仲間 紫煙は朝から「飯を食べに来ているヘタレホストに惚れた。

出会ったのは3週間前。その辺りは変な出会い方だったから、弥恵さんの記憶にも強く残っているらしい。

「しいちゃん！今日の『ご飯はなにかなあ？』

隣に立つて、人が精一杯頑張っているそばでへラへラ笑うその人は、某ホストクラブのN.O.・1だつたり。

毎朝と毎夕ご飯を食べに来るようになつた弥恵さんは、私が居ないときは何を食べているのだろう？

「弥恵さん、私が居ないとしちゃんと食べているんですか？」

「ん？食べないよ。基本的に」

だから肉付きが悪いんだと言えば口を尖らせて『だつてしちゃんの料理食つたら他の食つ氣失せるんだもんよ』だつて。ちょっとまだ諦められないかもしね。3週間もたつて更に惚れてる私…

…。

「もう！弥恵さん！お味噌汁が煮すぎて不味くなりますがからおとなしく待つて下さー？」

「あつやー。」めんよしこちゃん……！飯のためなら俺我慢するよー。」

相変わらず「飯中心ね……。どうせ私なんて只の同僚に変わりないのだらう」。いつも、私はつここの間から、お隣さんから同僚に昇格していた。

弥恵さんホストクラブで、シイのスウェーツは物凄く評判で、支配人によるところの週間で売り上げが格段アップしたらし。

……私のスウェーツでね。こんな時にフランス生まれフランス育ちは役に立つ。

私は出来たお味噌汁ど、飯を冷めないついでよそい、弥恵さんの前に置き、自分の前にも置いた。

「腹減ったーよっしゃー。しこちゃん、今日俺同伴テートだから沢山食べるな！」

「……」

またか。しかもようこよつて学校がある田代ー邪魔できなー！

「へへ……じいちゃんもしかして焼きもつですかあ？」

くらくら笑しながら皿を手に持つて立っているのが、弥恵さんの怖いところ。

「んなはずないでしょ。米の心配ですよ」

「うえー。つまんなあー」

「……キモス」

「なつー・紫暉ー。」

「……つー。」

不意に呼ばれた本名にゾドキリ。そいつとつ末期ね……。

「学校行くから出て」

「はあー」

予め用意しておいた鞄を手に、弥恵さんが出るのを待つて鍵をしめた。

「じゃ、今日は夕飯はいりませんね？」

「うん。頼むよん」

弥恵さんの居ない夕飯か……ちょっと寂しい気がした。

アパートを出で、交差点に差し掛かる。ここからは、大通りになつていて、この時間帯は何時も人がゴミみたくウジャウジャいる。ちょうど私が信号機の前に立つたら赤になった。

「紫暉じゅん？おはよー」

何時もの聞き慣れた声がある。七緒だ。

「おはよー七緒」

「はれ？今日元気なくない？弥恵さんの事？」

親友である七緒には、私がホストクラブでバイトしている事から
弥恵さんの事まで教えて居る。

「まあ、ね」

「そうか。じゃ、教室でじっくり聞くよ。ここは人が多いもの」

「うん……ありがと」

今の彼氏を落として付き合いつまで持つて行った七緒は良き恋愛の
先輩になる。

もつとも、真似はしたくない。あれが効くのは彼氏の柚木君だけ
だ。

交差点を過ぎ、暫くすると学校が見えてくる。私の通う高校は全
国的にもかなりレベルが高いらしく、なかなか成績のいい私でもテ
ストの成績で上位に入るのは、5回に一回くらいだ。

そして今日がその超競争率の高いテスト初日。バイトを始めたか
らと言い、成績が落ちるわけには行かない。昨日は徹夜はよくな
いので良く寝た。悔いはない。

七緒と私は少し緊張しながらピリピリとした雰囲気の校舎に入っ
た。

「七緒～元氣だしなよお……」

「え、えへへ……」めんね紫暉。今日は相談にのれやうになことよ

「うそ……恥こよ。……ねえ七緒？恋をすると、成績は下がる？」

「……下がる」

「……」

「違つ……紫暉ー！いつまでも親に振り回され……あつー！」

「……」

七緒はあからさまに不味い、といつ顔をした。私の前で親のはなしはタブーなのだ。

「紫暉……」

「屋上に行つて来る」

「いわん……」

「大丈夫だつて。頭冷やしてくるね？」

「うん……」

結局その日はテストだけ受けた、そのままバイトに行くのだった。

「しげちゃん！浮かない顔だなあ」

「ヤエさん……」

「え……マチでテンション低いし。何? デリしたの?..」

「……」

私はにこり、と笑い誤魔化した。

「……しげちゃんが！変だ！」

いつもと違う私を見て弥恵さんが慌てふためく。気持とは裏腹に、今日もスウィーツは良く売れた。

弥恵さんも今日は絶好調らしく、ヘラヘラ笑いでまた客を捕まえたらしいかった。

私を心配してか、N.O.・3のホスト、ナカヤさんが話しかけてきた。

「シイ今日元気ないよ? どうしたの?..」

ナカヤさんは、顔が可愛い系なので、癒し系キャラとして、このクラブでもなかなかの人気だ。

「そうですか？そんな事ありませんよ? ほら、指名が入っているん

ですから、早く行つてあげてください?」

「うん……」

ナカヤさんは心配そうにお密さんのもとへ向かつた。

皆さんに迷惑をかけている私は最低だ。見た目だけでも元気にならうとい、めいっぱに空元氣をふるまつた。

しかしそんな空元氣もほほ毎日私に会つて居る“奴”には、ばれてしまひ。

「じーちゃん空元氣だな」

「なつーそんな事ないですつてー」

仕事後、休息室での会話。私は弥恵さんのくらくらを見習つてくらッと笑つてみせる。

「どうしたんですね? そんなに真剣な顔して」

「……紫暉」

「……」

その切長で綺麗な田で見つめるのは反則だよ……。あと今度。

「なんかあるなら、俺に言え」

「……」

「一人で抱え込むなよ」

「……そんな、急に言われても……」

「……バイオリン」

「……つー」

「初めて会った日、ひいてた。……あんなにうまいのに、何で練習しない? レッスンに通う気配もない。……何で辞めた?」

弥恵さん。ピンポイント過すぎるよ。そこだけは……そこだけは誰にも触れてほしくなかつたのに。

「……バイオリン、嫌になつて」

「嘘だ」

「……つー」

「顔が嘘ついてる」

私は……」の人に全く叶わないらしい。気付けば、自分とバイオリンの事を、いつしか弥恵さん話し始めていた自分がいた。

つづく

悩みと疾（前書き）

多少シリーズ？よく分かりませんが内容だけは真面目な話です。

悩みと涙

小さい頃の記憶。どこかはハツキリと分からぬけれど、自分自身
住んでいたフランスの郊外にある家。

私がバイオリンを弾き始めた日の記憶。

「なあ？ 抱え込まないで。俺に話せよ」

「弥恵さん……」

「しごくやこじ話になつてこるから」とさくらつよ

「……」

私は弥恵さんを正面に据え、押し黙つた。だいたい、一体何で関
係ない弥恵さんに私の事を話す必要がある？

「黙つてないで早く言えよ」

「本当に……何でもありますか？」

「またか！ そおやつて…こつも俺！」……隠して

「……弥恵さんは関係ありませんから」

「何でだよー！」

肩を捕まれ、激しく揺すられる。

「家族の事だつて！何も話してくれない……」

「……」

「お前はそれで良いのか？！それじゃ、何のために……」

辞めて。それ以上何も言わないで。

それを言われてしまつたら、私は……

「紫睡……何だよーなんでそんな……悲しそうなんだんよー！」

「…………ひ……弥恵ちゃん……」

「話せよー俺に。何でも聞く。俺、お前の力になりたいよ！」

今日だけはヘラヘラしてなくて。何だか真っ直ぐな視線が私の心臓を掴んだ。

「なあ紫睡……。お前そんなんに頑張つて成績上げて、何がしたいんだ？」

「…………」

何で……？私は本当は分かつていた。私が大学を出てやりたいこと？大学なんか出たいの？本当は……本当は……。

「バイオリンがしたいんだろ？」

「うん……うん！」

気付けば、弥恵さんの胸に抱かれて、泣いていて。普段なら有り得ない光景で、こんな時なのに、ときめいた。

抱き締めていた手の力が、不意に緩む。私は心なしか、不安になり弥恵さんを見上げた。

数分後

「じゃあまた！俺としぃちゃんは帰るからね～」

「はい。お疲れさん」

弥恵さんと一足早く帰宅する。私が泣いている所を、ナヤトさんが見付けてくれ、『うーん。理由は分からないけど……今日は帰りな？』と言つてくれた。弥恵さんが私を離したのは、ナヤトさんが来る気配がしたかららしい。気配が分かるなんて凄いと思った。普段ヘラヘラしているからに、弥恵さんが凄い人に見えた。肩越しに弥恵さんの顔を見る。

「お？しこりやんは俺に惚れたな？」

「……」

つい恥ずかしくて、弥恵さんの前を歩くようになってしまった。

「反応なし、か。しこりやんだけだよ。落とせないのは」

「え？」

「フフフ……何でもないよ

「なんか……ムカつく」

一ハハハッ！まあ、しいちゃんはまた俺に仮か出来たね」

あ
」

· · · 飯でいいからそれから · · ·

1

۲۰۱

1

機器がなるべく早く良い雰囲気のには

九

西新からたてた
震える手で電話に出た

なになに? しゃん顔か暗しせ? 「

弥恵さん 私明日ハイに行けません

「親から？」

黙り、頷く。やつくり顔をあげれば、笑顔の弥恵さんがいた。

「安心しな。俺も行つてやるから」

「……はい」

ちよつと待つて下せー。笑顔だけでも反則なこと、優しい笑みつて何ですか。

あんまり魅力的すぎで、一分くらい見つめてしまった。

「……俺もそろそろ……だな」

「え？」

「いや。何でもないよ。さあつー明日は戦いに行くんだから、体力の温存のために早く帰つてねるよ、じいちゃん！」

「……はあ」

き、気になるーと思いつつ、眠たい目を擦りながら帰路につく。

各部屋の手前で私と弥恵さんは別れた。

次の日

数時間前に会つたばかりのホストは既に私の家に来ていたらしい。私を起こしてくれた。

「おはよー、じいちゃん。今日も綺麗だね……」

甘い表情を出して手を握つてくる。私は無意識に口元が緩んでし

まつたが、直ぐにこれが弥恵さんの悪戯だと分かり。

「盛りてんじやねえ！」

「いだだだだ！」

弥恵さんの頭を連打。

「おーーー馬鹿になつたひどいするんだよーー女に甘い言葉が言えなくなるだろー？」

「大丈夫。もう弥恵さんは底まで来てしますから」

言い終わったあの小悪魔的な笑みも忘れない。

「小悪魔ー！」

「本当の事を言つたまでです」

弥恵さんが苦笑したように頭を搔く。「これは、勝ち目がないこと分かつた時の仕草だ。

「全くその通りだ。うんーしぃちゃんつてば俺の事、分かりすぎー」

確に。言われて初めて、やっぱり弥恵さんが好きなんだとか。

「……」

「しいちゃんは俺、大好きだねえ」

「……無駄と一緒に居たら、そりや分かるよつになるつてもんです」

「ふうん」

返事はそつけないけど、心なしか楽しそうな弥恵さん。

○ おはせ

- ん？ 否

「変な恵みやん……」かわいがれ

一
はいはい

弥恵さんか作ったわけじゃないでしょ」

お。悪いつい

にへらあ

頭を搔く。その仕草さえも……魅力的……。

「これがやがん?」

「！」

面と向かってジッと見つめいたらじい事に気付き、慌てて顔を反らし片づけへ向かう。

「…………しこりやん…………今…………」

「それ以上言つたら殺す」

「はい」

恥ずかしさ勝つての、葉は、もしかしたらチャンスだったかもしれない今を潰す。

弥恵さんと自分の食器を流してしまつて行くと、後ろに弥恵さんが立つ。

「なあ…………俺がついてるからさ。ヘタレだけ……いつまつ事は、得意なんだ」

「ヘタレ自覚してましたか」

「ああ。…………こつとも済まない。一人ではなにも出来ないんだ……」

「弥恵さん…………」

「…………？」

「そりそり戦いに行きましょうか」

「あ。行くの。頑張るつな」

「…………うん」

私はそれから數十分準備をし、いつも伸ばしている髪を結い、制服の短いスカートは下ろし、いかにも優等生を装つ。

「……なんだか……しきりやんじやないや」

そんな私を見て、弥恵さんは苦笑混じりに呟いた。

「弥恵さんも、スーツのインナー、間違えてお仕事用にしないでください?」

「分かつてゐよ」

弥恵さんの準備が整ったのを確認し、家を出た。……ひやんと鍵をしめて。

現在、ここ東京から電車に乗り、実家のある山梨へ向かう。電車だとかなり時間がかかるてしまつので、もしかすると特急を選んだ。

「う~ん。実は俺、実際に電車のるの、初めてかも」

「マジですか?」

「マジマジ。これ、ちやんと寝るスペースがあるじやん

「そうですね」

中で設置してあるベッドをながめ、弥恵さんが一ヤリ、と笑う。

「ねえしこひやん

「はー?」

「沿い寝しよ?」

「絶対嫌です

臨時定（だつて……ー）した私を見て弥恵さんは多少楽しそうな感じ。私はと黙り、緊張のあまり、駅弁的な物も食べられなかつた。

「しこひやん、着くまで寝よつ。ゆっくり休まないと明日体がもたないよ」

「はー」

辺りはまるで銀河鉄道に乗ったかのように、美しい星達が輝いていた。

「綺麗だね……」

弥恵さんが寝る前にさう言ったのを、私は翌日まで覚えていたが、やがて薄れていった。

続く

電車の旅（前書き）

テスト前のために更新が遅れてしまい、申し訳ないです。

電車の旅

暖かい。そんな雰囲気が体を包み込む感覚が心地いい。このまま、半日くらい寝ていられそつた。ガタン、と寝ているベッドが揺れ私の睡眠を遮る。

多少不機嫌な頭を起しすと、銀河鉄道の旅は終り、優しい朝日が出現てくれた。

ふと、脇腹に当たる、柔らかい毛の感触。まさか！

「やだつー弥恵さん？！」

「ん……？」

ムク……と起き上がる顔のわりに大きい体。180は優に越える長身男は起きて早々天井に頭をぶつけ、苦痛につめている。

「弥恵さんー何で私の横に？！沿い寝はやだつて言つたでしょ……」

ヘタレは頭が起きたらしく、元へりと笑い、

「ここちやん起しちゃうとしたら貯持よくて寝ちゃった……」

何て呑気な事を言い出す。『だつてこじ窓際だしね？』

「……セクハラ」

「えつ……俺とこちやんの仲じやない」

本気で焦つてこる弥恵さんがおかしくて、つい笑みがこぼれた。

色々やつて座席につくと、朝食が運ばれて来る。うん、今日はマロンパイとローズティー……甘さに酸味が良くなつて、何だか恋みたい、何て思う朝食だつた。

弥恵さんはそれを聞くと大爆笑したので、忽ち私達は乗客の顔見知りになる。

「弥恵さん……笑いすぎ」

「『じめん!』だつて女子高生からこんなにクサイセリフが出るなんて恋愛小説位なんだもん!」

「……！」

思わず赤面、私、そんなにクサかつたかな?

恋をするときでもクサイセリフの1つや2つくらい、言いたくなる物なのだと自分にいい聞かせ、何とか落ち着かせた。

ふと、弥恵さんを見るとバツチリと視線がぶつかる。え、あっちも私を見てた。慌てて顔をそらす。

「何ですか?」

「うんや。俺しいちゃんの事何も知らないなあ……って思ったのさ」

「これから大体の事は分かりますよ。実家に行くわけだし」

「うん」

「弥恵さんこそ、私の中では“謎多き隣のヘタレホスト”です」

「せめて“隣のホストさん”と言ひて欲しいな

「へタレが足りません」

「……やつぱ？」

「へらと笑うけど、どこか苦笑混じり。何だかそれが妙に色気が
あつて大人の男を感じさせる。

……ちょっと、寂しい気持になつた。私は何だかんだ言いながら
結局は仕事の後輩で、隣に住んでいるだけなんだ……

私の気を知つてか知らずか、頭に優しい感触が触れた。弥恵さん
の、優しい表情がある。柔軟な顔付きはしているけど、私はこの人
が優しい表情をするところをまだ2回しか見ていない。

弥恵さん、妙に冷めていたりするから、時々怖くなる。それだから
優しい笑顔を見る事が出来る人つて私くらいなのかも、とか勝手
に想像したり。

舞い上がつてボーッとしていたら弥恵さんに不思議そうな顔をさ
れた。

「…………しゃん今田は考え方多くない?俺にも構つてよう

「え……?あ、ああ!済みません」

余りに幼い言い方につい苦笑が混じる。弥恵さんはいち早くそれ
を察知したらしく、むくれた。

「なんだよ。誰だつて相手にされないと悲しいじゃん

「分かつてますつて」

二

ちょっと照れ臭そつこ、頭を搔く。言ひ方とや態度は幼い癖して、ちゃんと大人であるべき所はきちんと育てられた、と言つ感じ。もしかして弥恵さんて、実はかなり良い所の坊っちゃんなのかも。

どうこうしているうちに、景色のなかに寛大な、ツンと立つ日本一の背高帽が見えた。

「すげー！生富士山初めて見た！」

山梨だ。

テンションの高くなる弥恵さんに比べ私はテンションが下がる。

ああ、これかにあの大嫌しな白い家に行くのた

考えただけで私は震えだした。

「しいちゃん……大丈夫だよ。なんたつて女性の話を聞く仕事して

「たぬき」

「お母さんなら弥恵さんの声」と聞いてくれるかもだけど……」

「おれやー……お父さん頑張るわ！」

「当たり前！」

「……………つ俺んちは居ないよつ

「え……」

もしかしてこれは弥恵さんの事を知るチャンスかも。聞こうとしたのに、時間は私の見方ではないようだ。

『次は甲府 次は甲府 ……』

「あつー！降りなきやー！」

「おつマジ？』

慌てて荷物を掻き集めて電車が停止するのを待つ。

私はさつきの事が聞きたかったけど、弥恵さんが話す時に話してくれると言じて、今は聞かないでおく事にした。駅を出て、町中に入り、市営のバスで実家がある地区へ行く。甲府市にあるとはいえ、若者で賑わうショッピングモールの近くに家があるわけではなく、郊外にあり、そこには静かな住宅地が広がる。

私と弥恵さんは一番近いバス停で降り、実家へ向かって歩き出した。私の実家付近は、何故だか坂が多く、成れた私にはなんの障害もないけど、体力の無い弥恵さんは（絶対子供の頃からお酒やつた）ハアハア言い、ついに実家まであと少しのところで膝にてをつけて止まった。

「し、しこちやんは……疲れない、のあ？」

「弥恵さんは酒の飲みすぎですよ。いかにも体力なそつだし」

「なつ……」

「ほり、あの坂を上れば私の実家です。頑張つて」

「うう～」

弥恵さんは足を引きずり着いてきた。家が近くなるに連れて、言葉数が少なくなる私を見て、弥恵さんは一生懸命話しかけてくれた。

「……着きました」

大きな、真っ白すぎる壁。庭がやたらでかくて、庭の隅には昔飼っていた犬、ジャスティの墓がある。

「じゃ、戦いに行きますか」

「はい」

インターほんに手を伸ばす。けど、やっぱあと少しのところで手が震えてしまう。

と、不意に手に暖かい優しさ。

「弥恵さん……」

「大丈夫。俺がいるから。ね？一緒に押そう」

「うんー。」

重なった手が、ゆっくりとインターほんに近付き、

ピンポン

インター ホンをならした。

緊迫（前書き）

試行錯誤。

なかなか印象的なシーンにするための表現が思いつかず、かなり日
にちがたちました：

緊迫

ガチャリ。音がなり前より少し瘦せて老けたお母さんが出てきた。

「紫暉、こりひしゃい。……久しぶり、ね

「久しぶり」

弥恵さんはにこいつ、といつもとは違つ種類の爽やかさが漂つ笑顔をお母さんに見せながら真面目な顔で挨拶した。

「初めてまして。僕は紫暉さんのバイトの先輩に当たる者です」

『僕』だなんて！ 弥恵さんは普段『俺』って自分の事を言つから、『僕』を使う所を見ることなんてきっと希少価値なんだ。

「先輩の、橋矢田 弥恵さん。優しくて良い人よ」

「そう……」

お母さんが弥恵さんを上から下までジャット眺め、目を細める。流石に弥恵さんもこの失礼な行動に顔が引きつった。

「もうーーあんまりジロジロ見ないでよー弥恵さんに失礼でしょ

「ああ、『めんなさいね』

「お構い無く」

でも流石にホスト、弥恵さんは直ぐに体制を持ち直し、お母さんに笑いかけた。

お母さんは 恐らく作り笑顔 を浮かべて、弥恵さんと私を招き入れる。

「ただいま……」

「お邪魔します」

「一人ともいらっしゃい」

懐かしいほど嫌な記憶しかないそこは、前より少しく述べていって、あまり変わっていない。

お母さんは賢明に私と話をしたがっていた。

「ねえ、紫暉。学校では友達は出来た？貴方、眞面目すぎるから心配で」

お母さんが『眞面目すぎるから』と言つたときの弥恵さんが笑いそうになるのを睨みつけ、必要最低限の事を話す。お母さんと話すと、気分が悪くなるのだ。

「……いる」

「そつー良かったわ。ねえ？何で言つ子なの？成績は良いの？」

出た。これだ。うちの両親はどこかが大きくていて、頭が同じレベルの人とつるめと言うのだ。頭が下の人とつるむと、影響される可能性があるから、ね？ きっとさつき弥恵さんを嫌な目で見

たのは、金髪の人が皆馬鹿だと思つてゐるからだ。

しかし今の時代東大にR系のお兄ちゃんやギャル娘が入つたりするのだから、それは間違いになる。

「勉強ははかどつてゐるかしら？」

「まあね。長旅で疲れてゐるのよ。私達を休ませて」

「そうね。部屋で休みなさい？紫睡は荷物があるからお連れせんには先に部屋で待つてもらつたら？」

「うん。弥恵さん、良いですか？」

「ふえ？あ、ああーわかつた」

弥恵さんはスタスターと階段を上がつていった。

荷物を片付けて部屋に上がると、弥恵さんが私のベッドに寝転がつて、くつろいでいる。私はやつと緊張の糸が切れ、膝の力が抜け、その場に腰が降りた。

「……しげやん。」

弥恵さんが心配そうに顔を覗く。

「大丈夫ですって」

「おー。でもしこらやんお母さんとあんま仲良くないんだな?」

「当たり前、だつてわつも見たでしょ、成績の事しか眼中にない」

私はかけていた眼鏡を外し、結っていた髪もほざいた。

「なあ? やつぱちゃんと話した方がいいよ。バイオリン。したいんだろう?」

「まあ、やうですけど」

でも、あの母に言つて何が分かるのだらつ?

「心配するな。俺も言つてやるから」

「え……」

こんな時にも関わらず、なぜこの人はこんなに優しいのだらつ。つい、甘えたくなる。止めて。私は甘える事はとっくに諦めているの!。

「紫瞳ー! 橋矢田さんも、『ご飯よ』

お母さんだ。夕食と言つひとは、お父さんが帰つてきた印。

「はあー!」

「ちよつ弥恵さんー! なに人ん家で元気に『ご飯望んで……!』

「いいじやないいじやない。いつだって『ご飯は美味しいもんだぜ

？」

「ひい

何故だらう、弥恵さんと居ると元気になれる自分がいたりして。
素敵なこと。

多分夕食にはお父さんが居る。修羅場になるけど弥恵さんと一緒に
なら乗り越えられる気がした。

階段を降りて行くと、辺りは既に芳しい臭いが広がっていて、私
達の食欲をそそる。

お父さんが、弥恵さんを見るなり、怪訝な顔をした。お母さん同
様、金髪は頭が悪いと思い込んでいる。
それを察したのか弥恵さんは、私がお父さんにバイトの先輩なの、
と紹介したあとで、

「えーっと……取り合えず、早稲田の慶應でてます

なんて、私もしらない凄い経歴を言った。

お父さんも、流石に態度が代わり、話題は私の話になつた。

「で、バイトとは、何をしているんだ？」

ギクリ。

「カフコですよ。彼女のスウェーツが評判なんです。ほら、彼女ス
ウェーツ得意でしょ？」「

「やうなのか？」

お父さんは不思議そうな顔で私を見つめる。私は黙つて頷いた。
それはお母さんも同じで、私の両親は私が何が得意だとか、好き
だとかは関係なく、只私の頭だけを見ているのだ。

素顔の私をしらない、しらうともしない、只成績だけ見てる。
弥恵さんは心底驚いたようで、目を見開いた。

「貴方たちは、自分の娘の得意なものも知らないのですか？」

「そんなことはない。なあ？紫暉の得意なものはまだ有るよな？」

来た。

「勉強」

瞬間、弥恵さんの周りの空気が変わる。声は変わらないものの、
静かになった。

「……ちょっと、失礼」

力チン といつて弥恵さんはホスト特有のあの高かつたライター
で煙草に火をつけた。

私は弥恵さんについて知らない事が多すぎる。あいつミサキさん
達お客様は皆弥恵さんが煙草を吸つことを知ってるだろ？

「君は煙草を吸うのかね」

「たまに」

「私は吸わんのだよ。何しろ臭いからな」

大事なことを忘れていた！お父さんは煙草が大嫌いなのだ！

案の定、お父さんは多少機嫌悪く鼻を鳴らし食事に取り掛かった。

「で。お父さん、マジでしいちゃんの好きな事知らないんですか？」

「いや、だからさつから言つてこるだらう。勉強だ」

まるで私に頷けと言つかの様に、視線で威圧してくれる。
危うく頷こうとする所に弥恵さんがくちばくで ダイジョウブ。
オレガツイテル。 って言うのが分かった。
弥恵さんにコクリ、と頷き深呼吸をしたあと、お父さんを見据えた。

「お父さん。私、バイオリンが好きで、得意なのは勉強よりも菓子づくりなの

一瞬の沈黙。私は緊張した。思いきつて言つたのだ。お父さん達もきっと分かってくれるよね？

夜明けの希望（前書き）

前回に引き続き、紫煙の実家へんです。
お楽しみください。

夜明けの希望

期待したのに。私、気持を伝えようと、心を開いてと努力したのに。

私のやり方が悪かった?伝えようとするほどに、頭の中が真っ白になつた。

「バイオリン……？スウィーツだと？」

「…………！」

何故、何故。お父さんは分かつてくれなかつた。

「紫暉。何か勘違いしているぞ。お前が好きなのは勉強で得意なことも勉強の筈だ。その男に何を吹き込まれたか知らないが……父さんはお前の事が分からぬ筈がない」

私はもう、言葉も出ず、只押し黙つていた。

「そうよ。小ちこ頃から紫暉はずつと勉強が好きで……」

止めて、ヤメテ………どうしてそんな事が言えるの?私にバイオリンを習わせたのもスウィーツを教えてくれたのも、お母さんじゃない!

もう聞きたくなかった。一度開きかけた扉は、開く寸前に、また閉じようしていた。

光が失われていく………私の心が闇に染まりきる前に、誰か助けに来て……！

「あんた、どうしてそんな事が言えるんだ！」

その時だつた。一筋の光が、私を細く、しかし力強く照らした。
私の光源は、弥恵さんだつた。

「何……？」

「あんた、おかしんじゃない？娘がそう言つてんだ、紫暉はバイオリンが好きでスワイーツ作るのが得意に決まつてゐるーあんたらは全く紫暉を見てないぜ。否、見よつとしないんだ！」

緊迫した状況なのに、裏腹に晴れしていく私の心があつた。

「弥恵わ……」

「ほー。もう一度、しげちゃんの口で伝えるんだ。しげちゃんの両親が聞いてくれなくとも俺が聞いているから。覚悟をきめて、自分の気持を言つんだ」

私は暫く弥恵さんを見つめた後、コクリと頷き、慎んで微笑みながら言つた。
ぐぐもつてモヤモヤした感覚はどこかに消えている。

「お父さん、お母さん。私は勉強よりも、バイオリンがしたい。スウイーツ作りたい。今のバイトも、嘘はつきません。ホストクラブのキッチンなの」

自分でもビックリするくらい、スッキリと晴れ晴れしい気分の自分が嫌な思い出が詰まつた部屋に凜として立つていた。

「何て事だ！ホストクラブだと？！」

「（近所さんに会わせる顔がないわ！）」

「なんと言われようが構わない！私は今、自分に自信を持っていた！」

「バイオリンのレッスンは、通わせてあげてください」

「そんなの、お金の無駄よ」

「俺が払いますから」

「え……？」

「」の言葉にはさすがに驚いた。

「じいちゃん、俺金はあるし大丈夫だよ。なんたってN.O.・1ホストだし」

「そういえばそうだった！」の人の貯金は一生では使いきれないくらいの額だったのだ。

「詳細は後で話すよ。今は（両親に理解してもらいたい）」

「はい」

私はお父さんおと母さんを見つめた。否覚悟があり強い意思を持つ目をしていたため、睨んだ様に見えたかもしれない。

「お父さん……お母さん、私はバイオリンを頬こまか」

「トーリンー」

お母さんは反対だらけ。お父さんが「リラード否定したのだ。

「あなた、紫暉がやりたいならせた方が良いこと思こまか」

「なつ……」

お母さんは「ここと微笑むと、お父さんを見つめた。

「私嬉しいの。やつと本音を話してくれて。やつとあの子本音よ」

「トーリン……」

「あなたも分かるでしょ? あの子の顔色が違つてたわ。やつと何を言つても無駄よ」

悪このは両親だけじゃなくてきつと何も話せなかつた私も……。
お母さんは腕をくくんでグチグチ言つて呟く。

「紫暉、部屋に床つてお風呂の枚数をしなや?」

「は、は?」

「……じゃ、失礼しまーす」

「」のから起じるおひつ事を弥恵さんはじめ察知したトーリン

『一緒にお風呂入ぬ~?』なんてセクハラな発言をして来る。

「……嫌」

「つーめーたー！入る前の風呂掃除位付き合つてよ……」

「あ、風呂掃除ね」

「まやかしいちゃん！変な方向の想像した？」

「弥恵さんがセクハラ発言みたいなのはするからですー！」

私が階段の途中で子付たため、弥恵さんが足を踏み外しそうになる。

「わわわ……！」

「あつーじめんなさい」

慌てて弥恵さんの腕を掴み引き寄せる。細々している弥恵さんは私の力でも十分引き寄せる事が出来た。

「もう！危ないだろ？……俺が怪我してホスト休んだらどれだけの人が泣くと思ってんの？」

「……！」

今、私弥恵さんの声なんて聞こえてなかつた。だつて、息が額にかかるくらい……私と弥恵さんの距離は近いから。

恥ずかしくなつて、うつ向いたら、弥恵さんは暫く考えて気付いたらしくて、パツと離れた。

「……なんか、その、『じめんよ?』

「……別に、気にしないし」

「クク……」

ちょっと強がってみたら、急に弥恵さんが笑いだした。

「なつ!なんですか?」

「だつて、しちゃんかわいんだもんよ」

「可愛いい……?」

やつと赤面が治りかけたのに、この人の仕草、言葉、視線に……
また、赤面した。

「赤面してんのに、強がる娘、俺初めてだ。しちゃん。やっぱ俺
には君が新鮮に感じるよ」

「……?」

それは誉め言葉ですか?って聞くのをしたけど、弥恵さんはわざわざと一階に上がつていつてしまつた。

「うん。また来るから。じゃあね

翌日

「これから、一日かけて東京へ帰る。

お母さんは駅まで見送りに来てくれた。

「じゃあね。東京でも頑張るのよ？橋矢田さん、紫暉を頼みますね」

「任せてくださいー！」

「お母さん、私勉強も頑張るよ。勉強してフランスに留学する」

「金は俺持ち」

「まあー悪いわー！私達が頑張つてだすから、橋矢田さんはお気遣いなく？」

「いや、俺も一緒に行きたいし」

「「え」」

「へー、と笑って弥恵さんは頭をかいた。

また明日からは、普通の生活が始まる。でも、私は今までの私じゃない。ちゃんと自分に自信がある。

「さあーこれからスワイーツの勉強しなきやー！」

『間もなく、山梨 東京の特急が発射致します。』乗車の際は

「早く！しちゃん

「待つて下さいー！

やがて男女の陰は人混みに紛れて見えなくなつた。

嵐の前の休息（前書き）

今回は最終話の序章になります。

嵐の前の休息

朝起きて、窓開けて新鮮な空気を吸う。

「なんて平和な朝なの……！」

何だか私は100年ぶりに朝が来たような気がした。何故だろう
暫く考え氣付く。

そう。今日は奴が来ていないのだ。いつもなら、しげちゃんしい
ちゃん煩いくせに……。どうかしたのだろうか。

何と無く嫌な予感がして、私は（実は初めて）弥恵さんの部屋へ
と向かった。

ガチャリ。

「弥恵さん。どうしたんですか？今日朝御飯いらないんですかあ
？」

「…………」

「…………？」

「しげちゃん…………助けて…………」

何と聞き取れない声がしたかと思えば、床に彼が転がっていた。

「新手の遊びですか？悪いけど、遊びに付き合つてゐる暇はありま

せん一や、早く起きてー。」

無理矢理起きようと弥恵さんを引き上げたら、何と本当にキツイ
らしく、涙目で辛そうな顔をしていた。

「う……吐く

「ええつーは、早くトイマへー。」

数分後

「う……俺、死ぬかも」

「なあに言つちやつてるんですか。只の風邪でしょ、いつもの一〇倍へタレですね」

動けない弥恵さんをベットに寝かし付けた。

「……」

「お薬は飲みましたか?」

「飲んでない……動けなかつた」

「はあ。何処に?」

「あそこ……」

弥恵さんは生活感が全く感じられないスッキリと付き過ぎた部

屋の、これまた中はカップ麺ばかりの食器棚をセした。

「うーわ。カップ麺ばっかじゃないですか！肉付き悪いのが良く分かります！はい、これ飲んでください」

「口移し」

「……もがき苦しめ」

「済みません。調子のりすぎました」

なあんだ。以外に元気そうね。これならほつといて大丈夫そう。

「じゃ、安静にしていてください？私は一度戻ることになります」

そう言つと私は、弥恵さんを残し部屋を後にした。
さて。粥でも作つてあげよつ。弥恵さん、きっと喜ぶ。

「ホストが風邪引くなんて間抜けね」

笑いながら調理にかかつた。

粥を持って行くと、いつの間にか寝てしまつたらしい、弥恵さんは何かブツブツ咳している。

「ん……し……あ」

「…」

私の名前。もしかして私の夢見てる？

「真由……！」……」

「まゆ、か」

まゆ。私と弥恵さんが初めて会つた日以来の名前。
事情は知らないけど、弥恵さんはとにかく帰つて来てと言つていた。

ズキン、となる。何だらう。この胸騒ぎは。そうだ。私はこの後に及んで弥恵さんが好き。

今、私は確實に考えがある。

『まゆ』ちゃんは、弥恵さんの恋人なのではないかと。

考えていたら、弥恵さんが起きたらしい。

「どうした? 紫瞳、切なげな顔だ」

「……っ」

今考えたつてしようがない。弥恵さんには聞きこへこし。私に出来るのはただ一つ。

「お粥作つて来ましたよ。食べます?」

「おー、粥粥! やつたーーー!」

元気になつたらしい弥恵さんを見て私は安心した。

その日の夜

今日一田寝る羽田になつた弥恵は、目が冴えてしまい、起き上がる。

と、足の方に重たい感触。

「おひと……俺の小れこロックをさせ休みか」

田の前に居る少女はスウスウと穏やかに寝息を立てて居た。

「……無防備」

弥恵は、今日は頑張りせつけたしなあと、そつと彼女の髪を透いた。

「今日はあんがとね、『腫瘍』

としてそう言って彼女の額に口付けた。

「起きても起きても絶対あげられない『褒美』

何だか眠くなり、弥恵も寝るのだった。

勿論、足元の小さな彼女に布団をかけるのを忘れず。

空回りスレチガイ（前書き）

最終話です。

私自信この作品を愛していたため、最終話遅くなりました……ごめいわくおかけしました。

空回りスレチガイ

皆わんお久しぶり！

仲間 紫暉です。

私は、もう高校三年だからこの時期になると、クラスの仲間達は皆大学受験するみたい。

あれから、父さんに認めてもらつたために私はこれまで以上に勉強をした。

すると、私はいつの間にやら、校内一番になつていた。
担任は、私を讃め千切つた。なぜなら、この高校史上初の一一番を持続した者だから……らしい。

一番を持続した事はウチの高校ではフランス留学へのチケットが渡されたようなものなのである。
と言つのも、毎年卒業者のなかから、最も成績優秀者を選抜するからである。

国が援助する資金でフランスに独学留学できるシステムだ。
この事を弥恵さんに話したらとても喜んでいた。
そして、一緒にフランスへ行くと言に出した。……どうやら本気だつたらしい。

「あつちこは、頼もしい知り合いが居るからさ」

誰だらつ。とにかく私の為に緊急帰国して貰るらしい。 頑張つて料理つくらないと！
と、弥恵さんの携帯がなりだした。

着メロが『アシタカせつ記』だ……もののけ姫ファン？

「あー真由?……うん、うん。着いた?しぃちゃん家はね、三つ田

の角だよ

「え」

真由……わん? もしかして、弥恵さんの……。

「ああ、しいちゃん真由の事知らなかつたつけ?」

聞きたくない。嫌だ。ヤメテ……

ガチャリ。

「弥恵ーーお久しぶり!」

いきなり、あかいドレスを纏つた金髪の美女が……まさか、この人?

「うわあー真由ハヤツ!」

あ。無理。こんな人に叶うはずがないよ。
真由さんは、弥恵さんに抱きつく。

「あの、真由さん……? 初めまして」

「あらあら。可愛い子ねーもしかして弥恵、この子が例の弥恵の……ムグウ」

「バカツー。それいじょうこいなよ」

あれ？弥恵さん顔真っ赤……。真由さんの帰国がそんなに嬉しいんだ。

「あの、失礼ですがお一人はどんなご関係で？」

「あら。弥恵話してないの？」

「ああ、俺達は……」

弥恵さんが何か言おうとした瞬間。

「恋人同士よー！」

と真由さんが叫んだ。十分だった。私は、涙が出そうになるのを堪えて、

「わ、私、醤油買つてくるね？切れたみたい」

と言った。自分の声が思つたより弱々しくて、びっくりしたけど、私は家を飛び出した。

去り様に、弥恵さんが私を止める声が聞こえた。

「真由つてば何言い出したんだよー。
しげちゃん、あんなに弱々しい声……俺の事ひょいとは『仮にして
くれているのか?」

「俺、今までしげちゃんに会いたくて沢山迷惑かたがた、やつぱ
アンタを諦められないよ?」

「真由に相談するんじゃなかつたぜ。」

「何で」と詰つんだよー。」

「ふん。焼きもどりよ

「な……一糞姉貴! 後でぶつ潰す

「先ずはしげちゃん追い掛けなきやー!」

パタン! と戸を開めて走り行く弥恵を見て、真由はにこやかに笑
う。その笑顔は優しく美しい。

「うつでもしないこと、あの子達はクッソキモになにからねー。」

はあ。私が馬鹿だつたのよね。早く諦めれば良かった。
最初から分かつてたくせに。弥恵さんだつと真田さんで会
うために一緒にフランス行くつて言つてくれたんだ。

「ばかだな私」

私は近くの公園に座り込んだ。
それから、何時間たつたのだろう。弥恵さん達流石に心配するか
な。……帰る。

私はあまり気が進まないから、家から遠い東口から公園を出た。

俺は公園の西口に走り出した。

はあ。紫唾はどこいった？いない…………つか、大体俺と真由が姉弟に見えない方がおかしいんだよ！

俺達クオーターだから、同じ青い田と同じ金髪してるひつの！……あれ？あれ紫唾か？紫唾だ！やつと見付けた！

つたぐ、世話がやけんな。

紫唾モード

なんか疲れちゃった。コンビニ寄つてい。実際醤油切れてたんだよね。

「いらっしゃいませ~」

わあ。カツコいいお兄さん……！

弥恵さんなんてしらないんだからーこの人に乗換え……

「おい、紫唾！」

肩に手が触れた。

この声……弥恵さん？

「弥恵さん」

「『弥恵さん』じゃねえ、馬鹿！」

息切らして汗かいてる……もしかして、探してくれたの？

「探すだろ」

「『あんなやつ……真田さん』は？」

「あ、？糞姉貴なんておこってきたよ」

今なんて言ひて……糞姉貴って

私のなかに、真田さんと思ふ出でたわ。……あ。同じ壺ごと回
じ金髪してゐるのー！

「あの、とつあえず醤油買います」

「…………まごペーす」

私達は醤油を買つてコンビニを後にした。

「つたぐ、真由も真由だー！」

「弥恵さん……探しにくるたんですね」

「…………まあね」

あ。またあの笑いかた。今日初めてだな。

「あつがとついでこます。あの、私この際伝えておきたい事があります」

伝えるなり、今。真由さんがお姉さんだから、私が好きとは限らないけど。

ハッキリさせたおきたい。

「んー? なにこ言いなさこ俺!」

「……はい。あの、私なんか弥恵さんの事、好きみたいです」

切なくて、涙出てきた。弥恵さん、困るかな。

「……マジ?」

「え?」

弥恵さん、泣きそうな顔してる?……断られるかな。

「紫睡つて奴は俺を焦らせてばかりだ……」

「じめんなさい……?」

「ちげえよ。俺だってお前が好きなんだよ

え?

「ええええええええ——! ?」

夕暮れに私の声がこだました。……恥ずかしい

「さあて！見事二人もクツツイタ事だし！今日は一流パーティシェ、
橋矢田真由のパーティーよ！」

「会場俺ん家」

帰つたら、弥恵さんが真由さんを怒鳴る勢いで入つたけど、本人
がクラッカーを持つて手を繋ぐ私達を祝福したため、あれは真由さ
んの作戦だと判明した。

「真由はね、昔からあの方法でカップルを作つて來たんだ。……俺
忘れてたよ。恥ずかしいな」

「さあー卒業まで頑張らないと！」

空回りスレチガイ（後書き）

「J愛読ありがとうございました。

10話程度しかないこの作品ですが、嫌味のないホストを書いてみたくて書きました。

弥恵さんを『ヤエ』と読んでいる方も居るかも知れませんが、彼は『ヒロエ』さんです。

仕事時のみ、『ヤエ』となります。

しいちゃんに関しては、実はリア友がモデルだつたり。

頭が良く、料理ができる可愛い子なのです。

……流石にバイオリンはひけませんが。

では、まだどかかでお会いしましょうー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9858a/>

隣のホストさん

2010年10月12日04時04分発行